

' 85.06 月

井深対談

## パターンで読む二〇〇〇冊

ゲスト：上里 龍生

上里 龍生（うえさと・たつお）

昭和二十年三月三十日豊橋市生まれ。

昭和四十二年東京電機大学電子工学科卒業。

昭和四十九年から幼児教育に携わり、現在豊橋市仔羊幼稚園園長

## 読みたいから読む

**上里** 私は、子供の教育というのは必要があって始めることだと思うんです。その必要というのは、子供自身が別に思わなくても、親が必要を感じてそれでいいと思うんです。おれはうちのこの息子に仕事の後を継がしてやろうとって仕込むとか、いろんな技術を伝えるというのは、やっぱり親が必要を感じてその子供に仕込んでいくわけですね。

ところが、今の一般的な幼児教育を見ると、人間のどんな可能性でもあるんだ、だから小さいうちからたくさんいろんなことをやっておけばどんな人間にでもできるんだみたいなことで出発しているんじゃないかと思うんです。漢字教育も、二歳ぐらいの子供というのは非常によく覚えますし、与えればどんどん吸収する力はあるわけなんですが、子供自身が余り漢字の必要性というものを感じないわけです。そういう子供にそれを与えれば確かに身につけていくだけけれども、役に立たないという感じがしてしょうがないんですね。

私、読書力とか、そういうものは、非常に小さいうちから大事だと思って、どうしたら子供たちが本をたくさん読んでくれるかということを考えているわけなんです。ことしも、四歳の子供が、一年に千七百冊ぐらい本を読んでいるんです。五歳の子供でも二千冊を超えている子がいるんです。本といっても薄っぺらないいかげんなものではなくてちゃんとした本なんです、千冊読むというのは一日に三冊以上、二千冊というと六冊ぐらい読むわけですから、いくら何でもそんなに読むということは、はじめ無理だろうと思ったんです。

それが、我われよりも早いぐらいのスピードで読んじゃうわけです。ザーッと。それは本があるから読むんじゃなくて、読みたくてしょうがなく読むわけです。字は教えた覚えはないけれども覚えるということをやするわけですね、漢字であろうと何であろうと。だから、子供に、必要性を感じずような環境とか、そういうことを我われが与えてやれば、後、教えるとかいうことはもう我われの仕事じゃないんじゃないかなという気がするんです。

**井深** 大体、上里先生の考え方は、私は非常にいいと思うんだけど、必要に迫られてとか、必要に応じて教育をするんだとか、ということ以前に、私はやっぱり人間として備えなきゃならないものが何であるかというそれを与えていく時期と、与え方ということが、今まで全然やられていないんですね。

この間出た『ニキーチン夫妻と七人の子ども』という、ロシアの……。この本、すばらしい本です。この七人の子供たちを育てているのが体育から始まっているんだけど、体育であるとか、行儀であるとか、作法であるとか、そんなものは全然言わないんですけど、生まれたときから真っ裸にして、雪の中へ放り出しているんです。それで鍛えて、運動神経というもの 非常に緻密な神経ちみつというものが、生まれた時から 生まれてすぐの赤ちゃんに親の指をつかませてそのまま持ちあげることができる。そんな能力を持っているんです、赤ちゃんの握る力というのは。そういう時に、そういうものをおびき出すことは

まだ全然やられていないと思うんです。

## すれちがう親と子の心

**上里** 確かに井深さんがおっしゃるように、人間の成長していく過程でいろいろわからないこととか、必要なことを研究して、またそれがわかっていくということは必要でしょうし、そうしなきゃいけないと思うんですが、私みたいに実際にそれを実践していく立場になりますと、例えば、親子の愛情不足が原因でこういうような子供になったんだというのを実際調べてみると、お母さんはいろんなことを考えて子供のためと思ってスキンシップもたくさんやり、世話もし、いろんなことをやってきた結果が、逆に、子供はお母さんの愛情を受け取ることができなかったということもたくさんあるわけです。そのところを私はいつも……。

**井深** その大部分は、私、しつけの欠如だと思うんです。厳しいしつけを0歳から始めなかったところにあると思う。

**上里** ただ、そういうしつけとか、そういうことが非常にできにくい状態になっているんです、家庭の中が。というのは、余り子供が親を必要としてないんです。

**井深** ということは？

**上里** 私は、やっぱり、これは生まれて本当に何週間ぐらいの間にそういう要素ができていくような気がするんですがね。

**井深** いや、生まれた瞬間からできてますよ。

**上里** いや、そういうふうにお母さんが子供を育ててきたんだと思うんですが。というのは、子供というのはとにかく生まれたときは何もできないわけですから、いろんなことを一生懸命お母さんに伝えて、泣いたり、騒いだり……。

**井深** 訴えるわけね。

**上里** 訴えて、そして早くやってくれ、早くおっぱい飲ませてくれとかいろんなことをやって、そしてお母さんがそれに気がついて与えるというのが昔から行われてきたことだと思うんです。

**井深** うん、そうなの。それで、アメリカのスポックなんかの育児書などがそれを全部ぶち壊したね、戦後……。

**上里** ええ。ですからそれを子供が要求する前に、子供が必要としてないのに、どんどん次から次へと与えていくわけでしょう。

**井深** だから、その考え方を、私はどうしても日本で塗りかえなきゃだめだと思うんです。そういうことをわかってるのは先生方なんで、おなかの中からの予備校をひとつやってほしいと。本当に定時におっぱいを与えとか、そういう間違っただことばかりが堂々と通用しているんです。いくら泣いて訴えても答えてもらえなきゃ、これはもう諦めてそういうもんだと思っちゃいますから、子供は、自分でどんどん離れていくわけです。

**上里** ただ、そういうふうになったという責任は、やっぱり幼児教育者とか、学者とかにかなりあると思うんです。私は毎日、子供を見ていて思うんですが、そういう研究をしている学者とか、いろんな大学の先生とかいうのが、子供というのを本当に知ってないんじゃないかなと思うんですね。

**井深** 全然知ってない。一番悪いところは、お母さんと子供の関係を読んでないということろだと思っんです。だから、今までの教育学、幼児心理学、医学、全般にわたって、相当なぶち壊しというのを思い切ってやらなければ、私の考えているような教育改革というのは始められないという気がするんです。これはお母さんの自覚を待つしかない。

### 跳び箱も人間教育

**上里** うちの園では運動にも力を入れていて、例えば跳び箱なんですが、初めに、フォームを教えて順番に跳ばせてみました。そうしたら、きれいに跳ぶんです、確かに。ところが、失敗したときの防御が自然にできないんです。運動を始めたきっかけというのが、体を鍛えようとかそういうことじゃなくて、安全教育という……。

**井深** ああ、それは非常に立派なことですね。

**上里** それを始めたのに運動をしてけがをしたんじゃ何もならないわけです。これはちょっとやり方が間違っったということで、フォームとか、そんなものは関係なしでとにかく跳ぼうじゃないか、ということで、恐怖心とか、そういうものを持たさないように。ですから、前の子が走って跳び箱に行くかどうかぐらいのときに、次の子はもう走り出すわけです。フォームなんかはもう関係なしに、跳べる子も跳べない子も、上に乗ったって、跳び越えたって、何でもいいからというようなことで、どんどんやっていったら、自然に必要なフォームを身につけ、いろんなことをするんです。

**井深** まあ経験がないのに偉そうなことを言うけど、私はやっぱり最初は、ビデオでも何でもいいから、非常にティピカルな、模範的な、きれいな絵を見せてください。特に本当の選手の人が跳んで見せてやったら、あとは反射神経の問題で、ああいうことをやるということは頭の働きに物すごく大きな影響を及ぼすと思います。反射神経ですよ、ほとんどすべてのことは。

**上里** ええ。反射神経というか、勘ですね。

**井深** うん、勘ですよ、まあそこら辺含めてね。だから、右脳なんです。決して左脳の理屈なんか要らない、きれいな跳ぶ像を見れば、それを繰り返して見ていれば、自分で、「ああ」というふうに関し取っちゃうわけです。言葉なんか要らないと思うんです。それはもう体力のために体育をしているんじゃない。

だから、体育というような問題をもう一遍本当に考え直さないと、人間づくりに……。私なんて、十歳からゴルフをしてりゃ、今みたいな苦勞はしてないと思うんだけどね（笑い）。

**上里** だから、いつも私は、自分で子供たちにいるんなことをやって反省するのは、今やっていることは自分の知識を生かそうとしているのか、あるいは必要というものを感じてやっているのかということ、我われ実践する立場にあると、いつもそれを考えなきゃいけないと思うんです。

こうすれば子供はこうなるという知識でやった結果というのは、いつもよくないんです。こうやらなきゃいけない、今これが必要だということでやったことというのは、同じことをやっても子供の中に非常に大事なものとして育っていくんです。

**井深** 受け止められ方がね。

**上里** ええ。

## 愛情を伝える

**井深** それで、私は整理して、本当に必要なエレメントというのは何だろうかと、それを意味づけるとまずいと思うんです。パターンそのまま、とにかくインプットしていい時代がある。しかし、自分の意思表示ができるようになったら、例えば、漢字でも、今は0歳からやっている漢字というのは、犠牲であるとか、誠実であるとか、愛情とか、そういう抽象的な漢字をやっているんです。だけど、これが三歳になったら、今度耳であるとか、鼻であるとか、目であるとかという漢字に入っていくべきだと思うんです。その前に、およそ漢字というものが好きであるということにするための道具としての漢字は、もう大人になってもわからんような難しい漢字をやっておけばいいじゃないかという考えですね。

**上里** 何もしなくて、ただ子供が興味を持つまで待つとか、そんなことはあり得ないと思うんです。確かに、そのためには周りがいろんなそういう働きかけをしなければいけないんですね。そのところに働きかけをする気持ちがやっぱり子供たちに伝わっていくと思うんですけれども。本当にこれを好きにしようと思って働きかけてるのか、あるいはただたくさん今のうちに詰め込ませておこうか、といって同じことをやるんですが、子供たちというのはそれをちゃんと感じ取っているんです。

**井深** だから、お母さんの考えというのは本当によくわかるんだという、そういう伝え方をしなければいかんと思う。

**上里** 私は、だから、何をやるかというよりももっと先に、だれがやるかということ、やっぱりそこが先だと思うんです。私がこの子を教育するんだ、例えば、お母さんがそういう本当に愛情の固まりの中からやるんだという.....。

**井深** 私は今、教え方だろうが、教える回数だろうが、やり方だろうが、全部お母さんが赤ちゃんとも相談して作り出してくださいよと言っているわけですね。一日に五分しかしなくても結構だ、赤ちゃんがこういうものを認めるような顔をすればもっとやってもいいし、つまらなくなったらそんなものはやめちゃって、ほかの音楽を聴かせりゃいいんだ。育児というものはお母さんと子供の相談ずくで、できあがっていくもんだと、それを確立しな

きょうそであると信念を持っているんですね。

## パターンで読む二千冊の本

**上里** 自分のたくさんある豊富な知識とか、あるいは何かができるというものが、どういう価値を持ってくるかというのは、使い方だと思うんですね。

ただ、知識を与えればいいんだったら、コンピューター教育であろうと何であろうと、片っ端から詰め込めばいいんですが、それは使い方は全く教えてくれないわけです。ところが、非常に愛情を持った人が、これはこうなんだよと同じことを教えても、その人の心というのは自然にその言葉のいろんなものの中に伝わって行って、そういう知識をその人から得た人間というのは、ちゃんと立派にそれを使うことをいつの間にか身につけていくわけでしょう。

だから、ただ、知識、丸暗記能力の高い時期に、機械を使ってでも、どんな方法でも、とにかくたくさん詰め込んだ方が得だというのは、ちょっと危険があるんじゃないかなと思うんです。

**井深** 先ほどの二千冊というのが非常に興味があるんですけども、それはどうしてそういうふうになったんですか。幼稚園ではない？お母さんがやったわけですか。

**上里** いいえ、幼稚園がやったんです。

**井深** それはどういうふうにしてやったんですか。

**上里** 本好きにするということなんです。幼稚園の子が普通読む本というのは、みんな平仮名で書いてありますから、漢字はないんですが、例えば、二歳、三歳の、全く本も字も知らない子が幼稚園に入ってきますね。その子にこの本を読ませようと思ったときに、そこからいろんな単語を抜き出して、単語の雑誌カードをつくりまして、例えば朝日という字だったら、これが「あ」で、「さ」で、「ひ」だよということじゃなくて、これが「あさひ」というような感じでパッとそれが逆さであろうと……。

**井深** それは、パターンで読んでいるんですよ。

**上里** パターンで全部教えちゃうわけです。

**井深** だから、仮名よりも、漢字がどんどん多くなっていった方が手っ取り早いと思うんです。これは、本を読んでもということの意味というのが本当に違うんです。ページをパッと速読というのが今英語なんかではやっているんだけど、パッと意味をつかんでどんどん……。それでちゃんとストーリーというものは確実にそういう子供はつかまえてますね、幾ら根掘り葉掘り聞いてもね。

**上里** そうです。子どもはあっちこっちで覚えた単語がパーッと出てきただけで、そのページは何が書いてあるかわかるわけです。ですから、それを見ればお話がわかりますから、おもしろくてしょうがないわけです。初めて読んだ本が、ちゃんと自分で読めて ちゃんとじゃなく、「何々が～」とか、「何々を～」なんて言葉を知らないかもしれないけれども、

わかるわけです、見ていてもパーッとわかるわけです。だから、「あ、本を読むとおもしろい。こんな話を書いてある」というのをもう……。

**井深** 私は、漢字を持っているということ……こんな大変な幸福と、責務とを持っているのは、日本だけだと思うんです。漢字というものは、幸いなことにはよりパターンなんです。英語だってパターンでパーッと速読をやるけど、どう考えても、漢字でつかまえるつかまえる方と、英語の達者な人が英語のをパッパッとこう見るのとは違うんですよね。

**上里** 英語は、アルファベットが並んでいるのを読むときには、その順番にアルファベットを拾って行って「これは何ていう字だ」じゃなくて、本当にパターンだけでダーッと読んでいくわけです。ところが日本の、普通によく小学校なんかで一年生、二年生がやっている国語の時間を見ますと、そういうパターンというとらえ方じゃなくて、一字一字というようなことでやっていくわけです。あれじゃあおもしろくないし、嫌いになるだけです。

**井深** ところが、大人になると違うんです。木偏に何とかって書いてあったら、ああ、これは木の一種類で、林であるとか、森であるとか、そういうきっかけというものが必要になってくるんです、覚えるために。ところが子供というのはそういうきっかけなしに……。だから、これは丸暗記の時代ということを非常に重要視しなきゃならないんで、そこにキーワードというのか、そういうものは必要ないんです、子供は。だけど、もう小学校よりちょっと上がっていくと、記憶のためのキーワードというのがだんだん必要になってくるわけなんです。

ですから、これはもう、棒暗記と理解暗記とはまるで異質のもので、相反するものだったという考えを、私はもっと強めていきたいと思うんです。

**上里** 言葉の意味を教えただめですよ、幼稚園児に。言葉の範囲が非常に狭くなりますね。例えば、一つの俳句を教えようとするときに、「これはね、だれだれがつくった俳句で、こういう風景で、こういう話なんだよ」というような話をして俳句を教えたとしますね、一生そうなんです。その俳句を何回見ても、何回読んでも、そのことしかイメージにわいてこないんです。

意味を教えながら教えた言葉というのは、知識として子供に入っていくんです。ところが本当にパターンみたいな形で教えたものというのは、能力として入っていくんです。ですから、使われ方が全然違うんです、その子供からあらわれるときに。一生ただその教えられた意味で使うのか、あるいはいろんなニュアンスとか、いろんなものが含まれて、その人間の中から出てくるかということ。

**井深** 私は一番このごろ痛切に感じるのは、温かい、人のことを思いやれる人間をつくるというのは、やはりこれは一歳以下、三カ月とか、そこら辺から、お母さんがそのつもりを持ってもらわなきゃ、これはできないんじゃないかしらんという気がするんですがね。いい、タイムリーなときに何をするかということを考えなきゃいかんと思うんだけど。

## 人は変態する？

**上里** 確かに教育ということをもう一回新しい目で見直さないといけないと思うんですがね。今まで乳幼児の教育というのは、どういう前提のもとに研究されてきたかという、大人が、大人の小さいものが子供という感覚を持っているわけですね。大人をどんどん小さくすると子供になって、もっと小さくすると赤ん坊になるというような。

私は、大人を小さくすると小人にはなっても、赤ん坊にはならないと思うんです。それで、人の成長という言葉は余りふさわしくないんじゃないかと思っているんです。今では、人は変態すると思っているんですね、チョウチョやカエルのように。ですから、赤ん坊は赤ん坊、幼児は幼児、小学生は小学生、大人は大人、老人は老人という、全然違うものであって、その途中で、ある時期に突如として体じゅうのものがすべて変わって、外見上はちっとも変わってないかもしれないけど、すべて変わっていくと思うんです。ですから、小さいうちに何をしなきゃいけないとか、例えば五歳から始めたらこんなことができるから、じゃあ四歳から始めたらいいじゃないか、三歳から……とって、同じことを同じ考えで幾ら年齢を下げていってもだめだと思っんです。

というのは、今までの大人ではこうだったから、これは子供のうちからやっておいた方がいいだろうという考えとちっとも変わりはしないと思うんです。やっぱり食べ物一つにしたって、赤ん坊はおっぱいしか飲まないし、一歳過ぎれば御飯を食べるようになるわけでしょう、体も頭の中もすべて違うものになっているはずなんですね。ですから、そのときに、例えば、ものを見せたり、話をしたりという外見上は同じことをやっているかもしれないけど、どういうふうにそれが子供の中に入っていかかというのは全く違うものだと思うんです。

そのところを、わかってないと。それが今の大半の教育の間違いのもとじゃないかなと思います。

**井深** 人間を評価するのに、学力ばかりで評価してきたのが今までの日本の社会なんです。だから、学力、学校がよくできる人というものから順ぐりに選ばれるという社会体制から変わっていかなくちゃ、この問題はなかなか解決しない問題で、さっきから言われていた、社会のデマンドに応じていくべく教育というのが行われ過ぎたんです。

日本人の教育というのが全部「物主義」「知識主義」の教育であって、人間のための人間ということは一つも考えられなかったところに非常に重大ポイントというのがあって、それを切りかえてもらわなければ……臨教審でも何でも、人間というものをどう評価するかという……。

## ときめきが右脳を育てる

**上里** ところで教育というのは主に脳なんですけど、今までやってきた左脳教育というのは、五感からの脳なんですね。

**井深** そうなんです。だから、心の問題、感情の問題にはちょっとも触れてないんです。五感だけの脳なんです。

**上里** 例えば、音楽とか、芸術とか、体育とか、あるいは漢字とか、そういうことは確かに右脳の方に非常に関係のあるものではあるんですが、右脳に刺激を与えるというのは、やっぱり私は、胸の心臓あたりの、この心臓の辺にあるんじゃないかと思うんです。心がときめくとか、心躍るとか、胸を痛めるとか、そういうものがない限り、絵を見てウワーツきれいだとか、音楽を聴いて、ああ、すばらしいという、それがなかったらどんなにいい音楽を聴いたって、どんなにいい絵を見たって、右脳なんか育ちゃしないと思うんです。漢字であろうと運動であろうと何でもいいんですが、そのときに胸が本当にときめくかどうかということが、右脳に関係があるんじゃないかなと思うんですけれども。

**井深** どうも我われの教育というのは、左脳の教育ばかりやっていて、音楽とか、宗教の絵を見ても、あ、これはだれの絵だからということで、まず一目置いちゃって、さっき言われた、感激とか心に燃えるもので芸術に接してないんですよ。何世紀のいつごろどういう環境のもとにこんな絵ができたという、批評家的な目でばかりしか芸術を我われは鑑賞してないような気がするんですけども。

オリンピックの体操とか、フィギュアのスケートンなんていうのは、あのきれいなものを見ると、これはどうしても左脳じゃない、右脳で我われは感じざるを得ないわけなんですよね。そういうことで、右脳を養うということから幼児教育を、もう一遍見直していかなきゃいかんと思うんですけどね。

**上里** 私は、余り右だ左だと言わない方がいいんじゃないかなという気がするんですがね。

**井深** いや。もちろん、左脳、右脳というのは密接な関係があって、左脳だけでも存在しないし、右脳だけでも存在しないけど、私が非常に主張したいのは、右脳が先に育つんですよ、その育つときをミスしては永久に得られるものを得られなくなっちゃいますよということ。

骨董屋こつとうさんの小僧が修業するときに、うんと小さいときから本物を与えておけば、何も教えなくてもこれが本物であり、これが偽物だというのはパツとわかるんで、これはもう右脳だけなんですな。

**上里** 心理学者や生理学者が、右だ左だとやっているのをいろいろ聞いたり読んだりしますよね……。ちょうど手をポンとたたいてどっちが鳴ったみたいな、そんなような研究をしているような感じで、もっと人間というのを一つの固まりとしてとらえるべきじゃないかなという気がするんです。

**井深** だけど、もう放つといっても日本人というのは勉強好き、理屈好きなんだからこれは左脳がやってくれる。右脳というのを育てるためにあらゆることをやっていかなきゃならんというのは私の今の考えで、これ、今やっておかないとまたダーツと押し流されちゃうんで、それで右脳、右脳ということを極端に私は言ってるんです。

**上里** 私は、ある人のすばらしい右脳の働きというものは、やっぱり右脳で感ずるということ

がすばらしいことじゃないかなあと思うんですが、どうも何か、右脳を左脳で研究しているようなものが……。

**井深** 全部そうなっちゃうんですよ。全部右脳で納得させ、そして左脳でもって理づめにして。

**上里** 何かそういうものを見たときに、ああ、すばらしいと思って感激をしたり、ドキドキしたりということじゃなくて、いや、これは実はこうなんだよというね……。

**井深** こうこう、こうだからこうなんだよという、そういうのでないと納得できないんですよね。

## 裸で鍛える意志力

**上里** 私のところの仔羊幼稚園も、一つの目標というのは、何かを知っていると、何かができるかということじゃないんです。そうじゃなくて、自分が将来こういうことが必要だとか、こういうことをやろうと思ったときに、どのレベルで、どの高さでそういうふうに思い込めるかという、そういう精神力というんですかね。ですから、例えば、「あ、外国語を勉強してみたいからちょっとやってみようかな」と思う人が、「よし、どうしてもこれを自分のものにしてやろう」と思い込む人が、「まあちょっと何となくつき合い程度に」と思う人が、本当に同じことをやるにしても、その人がどこまでそういうことを思えるかということが問題だと思うんです。

それで、裸教育なんていうのはそうなんです、裸にすると皮膚が鍛えられて風邪を引かないなんていいですけど、そんなことないんです。皮膚なんか全然鍛えられないんです、裸にしたって。ただ、皮膚というのは一瞬にして状態が変わるんです。例えば、子供をピシッとしかると、もう皮膚は鳥肌が立ったり、毛が立ったり、そういうふうに一瞬にして皮膚の状態というのは変わるんです。

そのときに、皮膚がどういうふう、どこまで変わるかというのは、精神力だと思うんです。寒いところに、例えば、マイナス何十度というところにパッとさらされたときに、平気で「何くそ！」と思う力がどの程度の強さかということであって、皮膚そのものというのは何も鍛えられてないんです。

網走の流氷祭のときに、青年たちがたき火をたきながら泳ぐんだそうです、流氷の海で。ある観光客がそれを寒そうに見ていたんです。そうしたら、足をすべらして海に落ちちゃったというんです。しぶきが顔にパーッとかかった。パーッと凍ったら全部凍傷になっちゃったというんです、このぬれたところが。これは、ここで泳いでいる人と、その観光客と、皮膚が違うじゃなくて、裸になって飛び込もうという意気込みが違うだけだと思うんです。

**井深** さっきのニキーチンの子供たちの話におもしろいことが出ているのは、サウナで温めて、いきなり裸で雪の中へ、マイナス三十度ぐらいのところへ放り出して平気なんだけど、彼らは限度というものを非常にわきまえているね。ここまで我慢できる、これ以上やったら

危ないということを、なんか自然に身につけるといことを言ってますね。

**上里** そういう意志を鍛えるという方法の一つとして、裸というのは非常にやりやすいんですね。「何くそ！」というね……。

**井深** それで、裸だと、非常に体の状態とか、子供のリアクションとかがよくわかるということを書いていますね、そのお母さんは。それで、体でもって意志伝達というのをやるんだ。何とかわかってもらうということは、生まれた翌日の子供でもいろいろ訴えというのがあるんだけど、縫いぐるみの中に入っていたら、そんな訴えなんか絶対わからないですね。

**上里** 指導する先生というのは、何につけてもこういうことをすることによって子供がこう育っていくんだということを感じながらやらないとね。

**井深** だから、そこら辺に指導者の人生観というものが物を言うことになるんですよ。

**おわり**